



1982年(昭和57年)
10月号(No. 448)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目次

- 辻村伊助旧宅跡を探る 図書委員会(1)
— 湯河原から箱根旧街道へ —
- 或る遭難 折井健……………(2)
— 五十年目の回想 —
- 英 TRANSGLOBE 遠征隊……………(3)
- 科学研究委員会報告……………(3)
- 「低圧室」を利用した四千坪の体験
- 常念坊の宿帖 岡沢祐吉……………(4)
- 図書紹介……………(6)
- 「富嶽歴史」「万葉の山をゆく」
「安曇野挽歌」
山崎春雄さんの蔵書
小野 幸……………(6)
- 三本のエーデルワイス
坂倉登喜子……………(7)
- 小林碧郎……………(8)
- 秋十題
- 報告 科学研究委員会、三水会……………(9)
- お知らせ……………(10)
- 会務報告・ルーム日誌・会員移動……………(10)(11)
- 図書受入報告 図書委員会……………(10)(11)

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

辻村伊助旧宅跡を探る

— 湯河原から箱根旧街道へ —

図書委員会

恒例の図書委員会の懇親会が七月三、四日の両日、神奈川県湯河原のペンションで行なわれた。例年は翌日に小さな山や峠を歩すが、今年箱根旧街道の散策

辻村伊助一家罹災の憶い出

— 古川源治氏よりの手紙 —

(前略) 故辻村伊助さんの遺跡を調査の途、小生宅をお訪ね下された由でしたが不在にて失礼いたしました。帰宅後家人よりお話を受け給りましたので、多少ともご参考にならばと存じ古い記憶をたどり思い出したまを記します。

湯本仲町三八六番地、大正十年居住、敷地一・六五(クタール)(土地台帳による)。
広大な敷地にはシイ、カシ、ケヤキ等巨木の密生した自然林があり、一部既耕の畑地。
木造平屋建の内部は純洋風。

家族は伊助さん(死亡時三十八才)、ローザ夫人、長男 梓、次男 春名、三男 秋葉(明石)、他に女中一名(地元出身)、庭師(通勤)で、長男は湯本小学校二年生、次男は一年生。

一軒だけの離れ家であり、生活様式が全く異っていたので周囲の人との交際は全くなかった。庭内に外国の樹木が多数栽培されていた(ドイツトウヒ、ヒマラヤヤシギ等)。震災で埋没をまぬがれたヒマラヤヤシギの二本が現在湯本小学校々庭及び湯本富士屋ホテル前道

路に移植されて現存。庭内では高山植物の播種による育苗が行なわれていた。(災害後埋まらず残った材料庫に数百の空鉢が残る)

ホロホロ鳥(実名は不詳だが、鳴き声により土地の者がそう呼称)、鶏のような外国種の鳥が数羽飼育されていた。
辻村さんは小田原高等女学校の英語教師を勤められ、電車停留所まで朝夕徒歩通勤。夫人はあまり外出されなかった。

九月一日、小学校始業式、児童は十一時下校。通勤庭師は休日(当時は一日、十五日を多くの職人は定休とした)、普通授業日であったら子供さんは助かったかもしれない。定休日ではなかつたら庭師さんも遭難されたかもしれない。

地震による山崩れの間接の原因が発電所貯水池決壊による流水といわれているが、貯水池は機能上朝は空になり、昼間余分な水が徐々に貯えられ夕方満水になり、夜間電灯の需要増により放水される仕組みなので、午前十二時直前には貯水量は半分以下と推定される。

更にコンクリート壁崩壊後の流水は辻村家とは反対側の山の窪地にあった余剰水放水路方面に流出したも

後、湯本にある辻村伊助旧宅跡を探索見学するという、いかにも図書委員会に相応しい目的が加えられた。

当日、湯河原の駅でタクシ組と徒歩組に分かれた。入浴を済ませたタクシ組が湯上がりのビールを味わっている所へ徒歩組が大幅に遅れて到着。裏山に足を延ばし、ひと汗流しての到着とのこと。全員揃ったところで早速夕食。会務を離れ時間の制約がない。欲談は山に書物に大いに弾む。食事がひと区切りしたところで、今回のために島田さんが密かに準備してくださった、辻村さんと近藤茂吉さんに関するエピソードが披露された。

話の中で印象深かったのは、辻村伊助、近藤茂吉とウェスト

留守番電話(電話番号231-6859)

ンの兄、ロバート・ウェストンとの出会いとJAC人・近藤茂吉さんの話であった。いずれも「スウィス日記」にある場面だが、いかにも「山・人・本」の島田さんにふさわしい選択と思われた。

前者は「伊助、茂吉がグロース・シュレックホルンでの遭難後の静養のため、トゥーン湖畔のヒルテルフィングン滞在中の或る日、二人で対岸のシュピーツを訪れての帰り、トゥーンの湖上で偶然にもウェストンの兄、R・ウェストンに呼びとめられ、ひととき暮れゆくトゥーンの湖上で日本の話に花が咲いた」というあの場面の話である。翌日、二人が昼餐に招かれたR・ウェストンの宿が、後年島田さんがスイスを訪れた時、ジュネーブの旅行社で紹介されて泊ったホテル・モイであったことも偶然で、この奇しき縁を帰国後、近藤さんに話して、当時の思い出やR・ウェストンとの出会いのこと等を、なぜ伺っておかなかったのかと島田さんは心を残されていた。(仮りに、R・ウェストンと近藤さんとの間で、W・ウェストンの生いたちや弟観のような話が交わされていたとすれば近藤さんか

山をきれいに「山」は持ち帰ろう

のと推定される。大震災直後の山崩れの際、小生は直線距離六百弱の屋外にいたが、ものすごい土塵があたり一面を覆い(土石流)、水は大して流出してなかったと記憶されます。永年の貯水により底部のコンクリートが水圧で割れ、電力会社が幾回か補修していた事もあり、不断の漏水により山の深層に断層を生じたのではないかと判断します(現在も地下水となり多量の漏水あり)。

遺難後は一家全滅のため消息まったく不明、女中の遺体は同日夕発見される。ホロホ鳥の鶏舎は助かる。(大正十五年六月、果道入旧東海道V復旧工事)。

辻村家は元道路より二、三が高くなっていた(現在の地形とほぼ同じ)。居室は土石流により東北に約八〇度押し流され、現在の郵便局の位置から西、四、五〇度の地点で多量の家財等が発掘された。多くの労力と日数をかけて捜索されたが、巨石が重なり、土量が多いため遺体は探し出し得なかった。多くの書籍等と共に写真、日記、遺言状等も発掘された。

果道改修工事で元路盤に沿って土砂を排除、掘削したところ、前記家財等発掘された跡の底部路盤から一家五人が一同となった遺骨が発見されました。学校から帰ったお子さん達と一緒にお食事であられたか、或るいは地震後、崩壊埋没までの数分間、ご一家相擁しかばい合われ一同となっておられたことと思われる。

ら島田さんに伝えられ、ウェストンの人間像はより鮮明になると同時に、晩年や没後を偲ぶ糸口も、わが登山界に残されたかもしれないことを想うと、島田さんの心残りも思えた。果たして、R・ウェストンは弟の生いたちや弟観等を近藤さんに語っていたのだろうか。またウェストン家の家系は今も続いているのだろうか。

後者は、近藤茂吉さんのJAC精神を語るエピソードで、前記静養中における例の執達吏事件(この顛末を詳記する紙幅がないので「スウィス日記」ヒルテルフィングンの章に譲る。R・ウェストンと伊助、茂吉との出会いも、その章にある。)を紹介され、「筋の通らないことに対しては、たとえ異邦にあっても、外国人を相手として対等に、かつ堂々と渡り合

い、一歩も譲ることなく筋を通した」近藤さんにJAC人の良き伝統精神を見たと話された。私は、近藤さんという大先輩を

女中さんは台所、もしくは別の所にいたため違った状態で流出土の外側に出たものと推察されます。当時十七才の若輩でありました小生の記憶に残っておりましては以上の程度でございます。災害三年後に発掘された遺言状は十三ヶ条か残らないよう、その中には、「死後、遺骨や灰をなるべく残さないよう、その中にし保存するなら適當の機会にスイスの高山の頂上に埋めるか、或るいはクレバスの中に投げこんでもらいたい」と記されていたそうです(小田原近代百年史)中野敬次郎先生著。

山を崇敬され、山との宿縁を遠観されていた辻村さんの普段の心構えに心打たれる言葉でございます。またお人柄を偲んで足跡を頌える方が遺難地に記念碑を建立される計画を進められ、レリーフも完成されていたそうですが、戦争勃発のためレリーフは戦意高揚、資源抽出のため供出し、中断されてしまったそうです。惜しいことでございます。辻村さんと小田原との関係は中野先生が御兄上常助さん等近親者の直話により、詳しく百年史の一項でまとめておられます。中野先生は現在もご健在ですので念のため住所を記します。

小田原市南町二丁目二ノ一五
粗雑な筆運びですが、内容も貧弱なものがご判読下さい。
ご事業のご成功を心よりお祈り申し上げます。
七月五日
古川源治

と。所在が判明したことで今回の目的の半ばが達せられたことを喜びながら訪れると、運良く老人クラブのお年寄達が居合わせ、この向かいが旧辻村邸跡で幼ない頃、辻村邸を襲った崩壊跡で遊んだこと等を話してくれた。その崩壊跡も、今は宅地化され何軒かの家が建てられていた。背後の崖は、昔のままなのか、中程に竹藪がある地形は、当時の災禍を想像することに難くない地形で、高山植物のことを優先した「純情の人・辻村伊助」を偲ぶに余りがあった。また、近くに郷土史に明るい人がいるからと教えられて尋ねた古川源治さんは、生憎の留守で、奥さんからは詳しいことは伺えなかった。来意を伝え後日を約して辞し、湯本へ向かった。

梅雨にもかかわらず天候に恵ま

或る遭難

——五十年目の回想——

八月中旬には例年のように田舎のお盆をかねて穂高岳へ登ることにしている。十二日朝立ちで家を出た。横尾山荘までの予定であったが、道草を食わなかつたので、予定した時間より余程早く横尾の出会いに着いてしまった。盛夏とも思われぬ不安定な今日この頃の天候続きだが雨の心配は無さそうだった。

れ、辻村伊助の邸宅跡も見つかり、運良く、伊助の晩年も、いずれ古川さんを通して詳しくわかる見通しもつき、有意義な二日間であった。

参加者 島田巽 北島光子 大橋晋 織田沢美知子 伊藤博夫 越田和男 河野悠二 松家晋 岡沢祐吉 岩瀬皓祐 泉久恵 三上智津子 平井吉夫

追記

その後、当日お尋ねした湯本の古川源治さんより、辻村伊助一家罹災前後の状況を詳しく記した手紙が、懇親会の幹事だった岩瀬委員のもとに寄せられた。会員諸兄にとっても極めて貴重な内容なので、古川さんの了解を得、ここに手紙の全文を掲げてお礼とした。

(滝川 清)

折井 健一

その朝国鉄駅の掲示板で見た「季節割引の宣伝ポスター」のシナノキンバイの群落を前景にした洞沢槍の写真は必ずしも珍しいものではないが、妙に気にかかっていた。昭和七年七月十二日に早稲田大 学山岳部の洞沢合宿中に起こった思いがけないアクシデント。それは洞沢槍を登攀中の加藤才介君の

墜死であった。ちょうど五十年以前のことである。思いついて横尾の岩小舎まで足を延ばすことにした。

八月十二日のその日は一カ月遅れの彼の命日である。岩小舎で独りで静かに彼の冥福を祈り供養することにした。幸いにも誰れもいなかった。

あの事件の当日は昼中は好い天気であった。救援に駆けつけてくれた今田重太郎、中島政太郎(故人)、上条進、早川政雄さん、それに部員の今井友之助、小川猛男さん等に護られて、遺体は上高地へ下山した。その途次、夕刻からもすこい雷雨に見舞われた。遺体を岩小舎の奥の岩壁に安置して、何時間か雨のあがるのを待った。その間に暗い木立を縫うように稲妻が走ったのを覚えていた。

横尾橋を渡って梓川沿いに左岸の道を辿りながら、この夜半に前方からカンテラの灯のチラチラとこちらに向かって来るのがはつきりと見えた。既に上高地の池野パーティには知らせを出しておいたので、迎えに登って来たのかと思った。しかし行き交う人はなかった。こんなことが徳沢までの間に二度までもあった。重太郎さんは「迎え火」だと教えてくれた。今でも不思議に思っている。

岩小舎で、まことに貧しい供養であったが、「ちまき」と「鱈パン」を供えて、奥の壁に向かって彼の

面影を偲びながら合掌をした。

軽い食事を摂りながらの回想が続いた。過ぎ去った日の登山の喜びの中には、親しい者達を山で失った悲しい記憶のいくつかが、私のまわりに漂っているのを感じた。彼等が生きていてくれたら人生の良い仲間になっていたに違いない。

暗くなった岩小舎から見上げる屏風岩はとて高く、威圧的であった。これから先に独りで「オカシ」などする機会はもうあるまいと思いつつ、うとうとした。明け方は夜露がしっとりとして流石に寒さを覚えた。ヤッケの上・下を重ね着して、また暫く眠った。

ライトで岩小舎の内まで照らしながら三、四人の登山者が登って行った。横尾出合のキャンプの人達であつたらうか。

十三日午前八時溜沢ヒュッテ着。かねて打ち合わせておいたので長谷川恒男君のテントがすぐ見つかった。昨夜は、横尾山荘その他に私のことを問い合わせたが、何処にもいなかったと心配してくれていた。

岩小舎泊りは私自身も予定していなかったことなので、迷惑をかけてしまった。慎しまなくてはならない。

誘われるままに自信は無かったが北穂高の東稜に取り付いて、北穂高頂上から縦走路を穂高岳山荘へ行くことにした。長谷川君のメ

英 TRANSGLOBE

遠征隊

三年がかりの地球縦回りのひと航海で、南北両極点行を達成した、イギリスのTRANS GLOBE遠征隊はこの八月二十九日、テムズの川のグリニッジに帰着した。

極点争いで明けた二十世紀。とりわけ悲劇のヒーロー、スコット大佐やシャックルトン卿以来の壮舉として、パトロンのチャールズ王子の大歓迎を受けたという。

主役はラヌルフ・フィンネス卿(三八)とチャールズ・バートン(四〇)。一九七九年秋、出発当時はもう一人、オリバー・シェパードの計三人だった。この計画を十年前から温めていたフィンネス夫人のバージニアさんが乗り込んだ「ベンジャミン・パウリング」号(一二五〇)が支援するからで、まずサハラ砂漠越えのアフリカ縦断から南極大陸へ。

八カ月間、カードボード・ハット(基地)で越冬、一九八〇年十月南極点行を開始したが、四十七日間、一五三〇*の極点行のなかに、バートンが雪上車もともクレバスに転落する遭難もあり、同年十二月十四日、三人は南極点に立った。

戦後の英南極点行は、一九五七年十二月二十四日、ウェッデル海シャックルトン基地から出発したビアン・フックス卿が極点経由でロス海に抜けた南極大陸横断三二〇〇*がある。こ

のときロス海から支援したのがヒラリー卿で、ヒラリーは一九五八年一月四日、フックスは十五日遅れの十九日にそれぞれ極点を踏んだ。このフックス卿は今回の遠征にも参画、ロンドンから指揮した。

反転して九カ月後、北極のエルスマアール島から、ことしの二月北極点行を目差したが、すでにシェパードは脱落、八三〇*の行程のなかでは、ベースの火災、雪上車の海中水没、北極熊との遭遇など、難波を極めたが、四月十一日に極点に到着した。しかし帰途、この冬の記録的な暖波の来襲から、九十九日間浮氷に乗って漂流、ベンジャミン号に収容され九死に一生を得た。

八万三千*の大航海を終えて、久しぶりにジョンブルの意気を示したものが、さらにつけ加えるならば、ベンジャミン号のクルー四十人は十一カ国から集まり、無給の奉仕活動であった。「サラリー」に換金すると、約二億五百万円と、フィンネス卿は縁の下を強調。またこの遠征の協賛企業は一千社におよんでいるが、この航海の途中、パリ、ケイプタウン、シドニー、バンクーバーなど八都市の寄港先きで協賛会社の展示会を催し、地元商社から約十億円の発注を受けたという。往時の遠征にくらべると、このあたりが、いかにも現代的というところか。フィンネス卿はこの紀行を十八万語の本にまとめる。

(片山全平)

一、日時 昭和五十七年七月三日(土) 十時~十八時

一、場所 名古屋大学環境医学研究所低圧室
一、参加者(午前) 高遠宏、小西奎二、神谷光

科学研究委員会報告

「低圧室」を利用した

四千ドル体験

ンパーにリュックを預けたが、東稜も今の私にはなかなかのものであった。ナイフ・リッジはロープを張って確保してくれたので全く心配はなかったが、最後のピーク辺りから、まるで足の運びが重くなった。ガスの中から北穂高小屋のざわめきが聞こえてほっとした。

小屋で遅い昼食を摂って大休止した。穂高岳山荘へはここから長谷川君が連絡してくれたので何時に着いても心配はなかった。

縦走路からは時折、ガスの間に滝谷の岩壁がのぞかれた。やがて洞沢岳西尾根がぼんやり

常念坊の宿帖

悪天統きのこの夏、ほんの僅か見えた晴れ間を視天望気と天気予報で確かめると、急いで仕事を済ませ、ありあわせの古ぼけたテントを担いで常念を目差した。出発が十時頃だったので、日帰りはちよっと無理だった。

小屋には季節の終りと台風接近のため泊り客は少なく、小屋主の誘惑にも負けて、せっかく担いできたテントはそのままにして小屋泊りに変えてしまった。

夜、数少ない泊り客が寝てしまった後、小屋主と食堂で一杯飲みながら夜更けまで話し込んでいるうちに、この小屋の古い宿帖の話

とガスの中から近くに浮かんで見え、本日のコースの終りを思わせる。本日の出会った。

洞沢岳の鎖場をやっと乗り越えてがっくり。余り遅いので穂高岳山荘から英雄君を迎えに登って来るのに出会った。

穂高岳山荘の風呂にとっぷり浸って身の幸せを感じた。窓から暗い夜空の下に笠ヶ岳の稜線だけが細く朱の色に染まり、笠ヶ岳山荘の灯火がとて近くに見えた。去る七月に会員の鳥居亮さんに手を加えて貰った風車は機嫌よく回っていた。何とも贅沢な山登りであった。

岡沢 祐吉

が出た。現物は最近城山(松本)の種畜場跡に出来た資料館に預けてあるとのことだった。

どんな話からこれを見せてもらうことになったのかよく覚えてはいないのだが、山から降りた明るく日、この古い宿帖を見せてもらいに昔よく遠足の目的地になった種つけ場(と)皆は種畜場のことを言っていた)までではるばると出掛けた。

資料館のケースに入っていたその宿帖の表には、達者な筆跡で「大正八年七月上、胸中のアルプス 常念坊」と書かれてあった。これを明るい所に持ち出し、汗を

昭、千葉重美、中村純二、*伊藤忠男、*栗原俊雄、*榎田晴美、(*印は名大ネパールヒマラヤ氷河調査隊員)
〔午後〕渡辺兵力、高橋詢、斎藤桂、梅野淑子、大森弘一郎、前田文彦、中川和道、若林幸子

一、講師 環境医学研究所第5部 森滋夫助教

一、概要 最近、高所における速攻登山で注目を浴びている低圧室トレーニング法については当委員会でも取上げ、会報80号には島村清氏の講演概要が掲載されているが、中高年者の保健の目的にも有効というので、今回名大森研究室のご好意により委員有志が低圧室に実際入ってみてその認識を深めることになった。実験内容は森先生の別掲報告に譲るが、被験者が比較的高齢であったため、環境医学研究所としても平衡機能感覚を計測する等参考資料が得られた模様である。私共としては寝不足がてき面に結果に現われるその因果関係に驚いた次第であるが、このような科学と登山の共同実験の試みは今後とも必要であることを痛感し、更に対応を深めて行きたいと考えている。

(中村純二)

「低圧室」を利用した

四千メートル体験

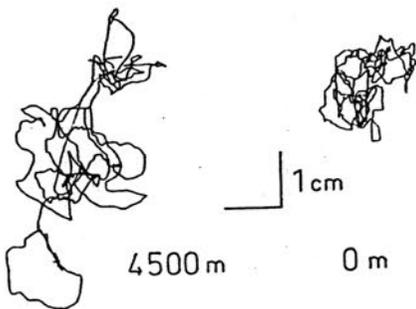
名古屋大学環境医学研究所

森 滋夫

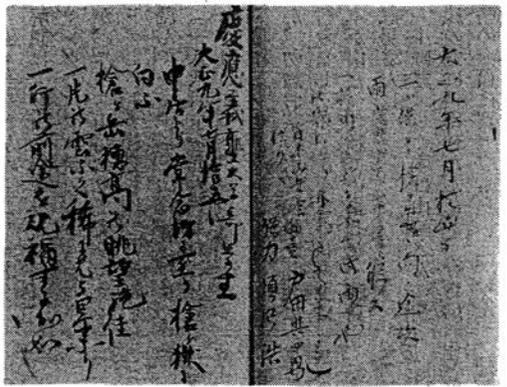
一九七八年、メスナーとハーベラーが、酸素ボンベを持たずにエベレスト登頂に成功したとき、世界の生理学者は一樣に驚いたものである。それは「限界」を越える、と考えられていたからである。その後、ヒマラヤ無酸素登山が

ブームとなり、多くの犠牲者が出ていることも事実である。登山事故の多くが低酸素障害に無関係でないことは、登山家達自身が一番よく知っている。高所登山は、高所順応、高所劣化との戦いなのである。

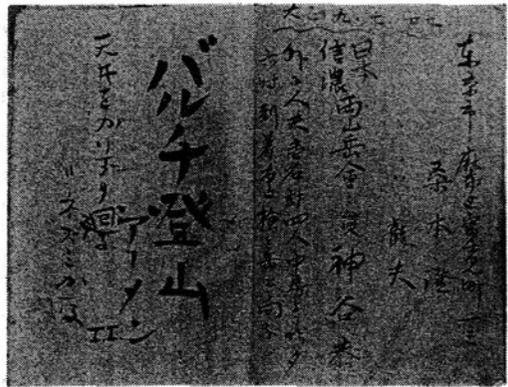
二年前、私達の研究所に、最新の装備を整えた「低圧室」ができた。以来、延四百余名が被験者となり、その半数以上が、高所登山を目差す登山家であった。そして彼等の多くが、低圧室で体験した低酸素障害の記憶が自己判断に役立った、と述べている。稀ならず、「高所順応不適合」とでも言うべき被験者に出くわす。体質的に低酸素に向かないようである。「あなたは高所登山はやめなさい」と警告できるだけの経験とデータを早く積み重ねたいものである。六千メートルまで減圧すると、五人に一人は一〇分以内に意識混濁を来す。低酸素の効果は、はっきり自覚するのは、四千メートルからである。本年七月三日、JAC科学研究会メンバーを主とした十六名の低圧体験に、四千メートル



体のゆらぎを検出する装置に現れた被験者の動揺の様子



右は日本山岳会員戸田与四男氏の署名のあるもの



左は信濃山岳会員ともなっている神谷恭氏の署名のあるもの

落さないように気をつけながら、目ぼしいものを写真に撮らせてもらった。

そこには日本山岳会員と書き添えて記名したものが二カ所あった。

一人は大正九年七月十四日にこの小屋に泊った戸田与四男氏で、信濃山岳会員ともなっていた。槍へ向かう途中、二の俣からこの小屋へやって来たと書いてある。

もう一人は大正九年七月二十七日、日本、信濃山岳会員 神谷恭とあった。神谷さんは大正九年六月に中村清太郎、加賀正太郎両氏の紹介で入会されているが、この年の七月に常念に登ったのであろう。信濃山岳会員でもあったということは初めて知ったのだが、長野県大町市のお生まれとあれば納得もゆく。

その他何度も記入しているのは地元の牧の衆、堀金村の衆などで、それに混って松本高等学校山岳部第何班何名といった記入も何頁かに見られた。酒井由郎と書いたものがその中では一番古かった。慶応義塾山岳部と書いてあるところには関経次郎、伊東弥六といった方々の名が見えた。この

選んだ理由である。最大作業能力が約二〇％低下するので、自転車エルゴメータを踏めば、その分だけ重く感じない。低酸素効果を最も適切に感じる方法にちがいない。四千以て体験のポイントとした理由である。私達の興味の一つに、低酸素下の平衡機能障害がある。体験希望者に高令者が多いことから、その参考データとして役立つことにした。身体のゆらぎを検出する装置に一分間立つのである。

四千人以て体験は、低圧室の広さに限りがあり、午前八名、午後八名に分かれた。平均年齢四十三才、最高六十七才、女性四名を含み、多彩な職業分布のグループであった。午前グループは七名が睡眠不足。四千以て、顔面紅潮、酩酊感、ふらつき、等があった。午後グループは全体に症状が軽く、四千五百以てまでの体験となった。睡眠不足、疲労は、著しく低酸素耐性を弱めるようである。原因はよくわからない。ふだんからスポーツを心がけるのも、低酸素に冒されたとき有利に作用する。心拍数増加や換気量

他にも慶応や早稲田の学生が泊った跡があるし、第七高等学校造士館旅行部、成城中学山岳隊、成蹊実務学校登山隊、松本中学校山岳部、名古屋好山会、日本アルコウ会など登山グループの名を書いたものが各所にあった。
H. Goto As. Professor The College of Eng. & Tokyo Imperial University と横文字で書きつけている人もいた。
昨年中房の百瀬孝会員のところで見せてもらったものに、土橋莊三氏が仲間と槍の北嶺尾根を縦走したらしい記述のあるものがあ

増大を、より早く誘発できるからである。四千以ては、安静時心拍数が平均一〇拍程度増加していた。これは登山家の値に近い。さらに、身体動揺が、予想に反して、あまり変化しなかった。いずれも、平素から運動をやっている人が多かったためと思われる。ただ一人、午後グループで睡眠不足のあった体験者が、四千五百以て著しく動揺を増していた(図参照)。
高令者二名に脚ブロック型不整脈、女性一名に心室性期外収縮を認めた。後者は、スポーツマンでよく見られる、心拍数増加により消失。そうでない場合も、前者二名の例を含め、私達の経験では、少なくとも四千五百以てまでは変化がない。

低圧室をうまく利用すれば、高所順応に要する期間を省略ないし短縮できるかもしれない。この可能性について、スポーツ科学者と登山家との共同実験をすすめて行きたい。生理学的裏づけには時間がかかるが、確かに有効なようであり、期待が持てる。

だが、このの宿帖にも「大正九年七夕祭の日、槍の絶頂肩より東鎌尾根を降り湯俣を経て大町に出ずべく一行四人当坊に宿る」と記されてあった。ここでは熊井博人の名が見えなかったが、どこかで合流したのだろうか。
目を引いた記述は播州人、古家実三(三十一才)氏のもので、「小島鳥水氏の『山水無盡蔵』を讀んで梓川の清溪と鎗が嶽の壮観とに憧憬れたのはもう十三年も昔の事でした。其後夏の来るたびに美しい流れと偉大な山の姿とは私の頭の中に無声の音楽を奏でない



山崎春雄さんの蔵書

た。この後古家氏は大天井、燕と経て中房に下ったようです。大町桂月は七月三十一日と八月十一日に書いた人の間の頁に書いています。以上、ざっとこの宿帖を紹介してみました。この大正八年ころ、それも里の宿屋ではなく三千米近い山小屋のものを、現在まで保存していたこと、山田恒男さんや山田利一さんに改めて敬意を表する次第です。

小野 幸

佐々会長さんの「この一本展」解説に「登山の指導書と言え、ヤングのマウンテン・クラブトか、スイス山岳会ウト支部のラートゲーパー」と記されているのを読んで、ふと山崎春雄さん(一九八六一一九六一)のことを思い出しました。昭和三十七、八年ごろでしたか、勿論お茶の水時代の土曜会に行きましたら、ルームの机の上に本が山とつまれていました。藤島敏男さんに、「小野君、この本は山崎さんの遺族の方に頼まれたんだが、今日出席の会員に買ってもらいたいん

で、値をつけてくれないか。安く、安くしてくれ」と申されました。この本は次の二十五冊でした。

- Blodig, K. Das Gehen auf Eis und Schnee. 1923
- Blodig, K. Die Vertrauensender Alpen. 1923
- De Amicis, U. Piccoli uomini e grandi montagne. 1924
- Fendrich, A. Der Skiläufer.
- Foferer. Winterliches Bergsteigen Alpine Schlauftechnik.
- Francé, R. Die Alpen in Natur- und Lebensbildern.
- Haas, R. Die Stimme des Berges. 1924



図書 紹介

富嶽歴覽

伏見 功著

「外国人の見た富士山」のサブタイトルが付いている。日本の夜明けともいえるべき幕末から明治にかけて、いろいろの目的を持った外国人がやって来た。外交官、医師、法律家、博学者画家 etc. 本書はそれらの人たちが富士を見たときどんな印象を受けたか、を各人の記述を元にし、註釈を加えつつ語っている。

日本への、従って富士山への予備知識が多少あったにしても、現代ほどではない頃だけに、富士見参記はそれぞれに面白いものがある。

緒言に「日本人のうちでも、特に富士山を眺め得る地域の人には、富士山が生活に定着して、殊更富士山に対して感動しない」とある。私などもそうした地域に成長したからうなづける言葉で、富士山の魅力は何かについて時折考えさせられるこ

とがある。

著者は、外国人が全くの白紙で富士山に接した驚きの方が、却って富士山の魅力をストリートに引き出しているのではないかと感じて、この企画をした。

一六五一年来日のおランダ人ヴィルマンから始まり、二十五、六人の外国人が含まれるが、この人たちに関連する各書物を読破するには相当の努力を要したのである。各人の生い立ちから来日の理由、富士に接するに到った行動時日など詳細に調べてあり、時の政府の外交政策の周章ぶりや、日本人の精神面などが背景となつて、肉づきの多い内容となつている。

ベリ、ハリス、ヒュースケンをはじめシーボルト、アーネスト・サトウ、イサベラ・バード、ウエズトン、八雲、レルヒなどわれわれに馴染み深い人々が登場し、昭和年代のブルーノ・タウトも顔を出す。(モースも欲しかったが)

オールコック、パークス、ウェズトン、八雲、レルヒの富士登山もあげてあり、一八六〇年のオールコックは日本を去るとき、富士山に最敬礼したという。また一九一年のレルヒに関して「途中までついできた新聞記者が、レルヒ

がスキーで富士に初登頂したと誤報したことは、レルヒの良心に反したが、レルヒは自身の問題として登山したのだから目的は達せられたのだ」と著者は書いていますが、これは山男の心情を理解した言葉で、こうした見解は登場各人物に及んでいる。

人物の写真が何枚か挿入されてもよかつたと思う。富士山に關しての異色ある本である。

四六判 三五〇ページ 昭和五十七年四月刊 現代旅行研究所 価二八〇〇円 (川崎精雄)

万葉の山をゆく

大和編

新井 清著

私はこの本を読みはじめて、今までのこの種の本とは違ったものを感じていた。著者が考古化学専攻の学者であるからだろうが、フィールド・ノートを読んでいるように思えたのである。私もこの種の本を書いていくからわかるのだが、万葉の歌を引用するにとどまらずに、著者の考え方が明確に付せられてある点もすばらしいと思う。例

今年もまた上高地山研で逢いましょう！

Helin, S Mount Everest. 1923
 Hoek, H Schnee, Sonne und Ski. 1926
 Hoek, H Wanderungen und Wandlungen. 1924
 Hoek, H Wege und Wegensosen. 1919
 Hoek, H Wetter, Wolken, Wind. 1926
 Kngy, J Aus dem Leben eines Bergsteigers. 1925
 Mayr, J Auf stillen Pfaden. 1924
 Morgenthaler, H Ihr Berge. 1909
 Nieberl, F Das Gehen auf Eis und Schnee.
 Renker, G Als Bergsteiger gegen Italien. 1918
 Sektion Uro. (S.A.C.) Ratgeber für Bergsteiger. 1916
 Weilmann, J Aus der Firmenwelt. 1923
 Wundt, T Höhenflug.
 Wundt, T Ich und die Berge.

1917
 Wundt, T Matterhorn. 1916
 Wundt, T Zernatt und seine Berge. 1930
 Zsigmondy, E Die Gefahren der Alpen.
 Zsigmondy, E Im Hochgebirge. 1889
 とにかく現金にしよう、と言う藤島さんに従って、ほんとうに安くつけ、当日来られた会員の方々にお願いして買っていただきました。Amicisを日高さんにおしつけたことだけはおぼえています、他の方々のお名前をいちは思いません。最後にKngyだけ残ったのを私が引きとって売り切れたのでした。
 それにしても、どうしてWimperやLunnやWestonものが一冊もなかったのかその時ふしぎに感じましたが、藤島さんにはお聞きせずじまいでした。

三本のエーデルワイス

坂倉登喜子

毎年恒例となったヨーロッパ・アルプス「花と氷河の旅」は今年で六回目、年ごとに人数が増えて、七才の小学生から七十一才の老人まで、幅広い年齢層の人たち五十九名、大部分が女性だが、ファミリーも何組か、親子三人、姉妹、夫婦、父娘などバラエティに富んだ大パーティーで、去る八月十一日全国から成田に集合、予定のコースを大移動しながら、安全に十二日間歩き、二十二日全員無事に帰国することができた。
 今年は例年のツェルマット、グ

えば大和三山の性別についても「香具山が畝傍山を雄男志等思慕したのだから、香具山が女で、畝傍山と耳梨山を男とするのが素直であると思う」とする。著者が歴史、国文学にかなり造詣が深いことをうかがうことができる。
 さらに、著者の専門にかかわる部分では一層に深いものを見せる。例えば万葉での「むらさき」「灰指」などについての論議がたのしく読めることにな

見る万葉の本がほとんどであるがこの本は登り、歩く万葉の本である。人里の中の山は著者も書いているが「登り口を見付けることが先決問題なのである」というように苦労がある。著者はそれを里人との対話をもって実にうまく解決している。である人と常に言葉をかわしていることがかわずらわしいように思えたのだが、そのことにより埋もれていたものをさぐりあてることができることを教えられる。
 著者の山歴の深さは自然に對するいつくしみの心で知ることになる。日本山岳会の携帯灰皿のパチンという蓋の音が樹林の中から聞こえてくる。布留の国見山から北を望んで「木々を伐ることは天に向ってつばきを吐くのと同じである」となげく。
 竜王山に登り、マックイムシによって枯れた樹令五百年の黒松に涙を流している。
 神社の石段が何段あるとか、何時に起床したとか、駅の売店で牛乳を飲んだとか、実にわずらわしいほどにわしく書かれている。終りのページに喫茶店でカレーを注文し女子中学生が心太を食べることを書いているが、その次を読むとそこには化学と民俗学と歴史があり、著者の観察眼と知識の深さを知るのだった。
 読み終わってすばらしい山行のあり方の一つに接したよるこびがあり、自分の山行が何かみすばらしく思えるのだった。
 地図は数箇所にはいっているがさらに欲をいえば細部のものもあればいいと思う。
 著者が序に書いているように、「山の上の道」をたどる読者が増えることを私も願いたいと思う。
 昭和五十七年四月一日 ナカニシヤ出版発行 二四六ページ 定価 一八〇〇円 (塚本珪一)

安曇野挽歌

田淵行男著

「安曇野挽歌」という書名は、まさに私の思いそのままだった。終戦をはさむ五年間、戦禍を避けて安曇野に暮らした私にとっては、

それが十代前半のもっとも多感な時期だっただけに、生涯忘れることのできない土地となった。
 著者の田淵行男氏は、その豊科町に住んでおられる。「高山蝶」「山の紋章・雪形」をはじめとする著書は、自然とともに生きる田淵氏の精魂傾けた貴重な記録ばかりだが、その中に「安曇野」と題する写真文集がある。今回はそれに続くものだが、「続・安曇野」と言わず「安曇野挽歌」としたところに、著者の思いがこめられている。
 第一部「白馬山麓」では、四季折々の北安曇の風景が収められている。雪の白馬三山、やがて黒土がのぞき雪解け水が野を走る。ミズバショウの可憐な花、夢のようなその群落。新緑や花の季節を過ぎて紅葉から枯野、新雪にいたる写真は、挽歌どころかまだまだ自然賛歌をうたいあげている。何でもない枯草の実が、愛情のこもったカメラワークによって、つやつやと寶石のように輝いているのも楽しい。
 第二部が「佐野坂以南」で、一般に安曇平といわれるあたり。田淵氏は豊科町に住む以前、常念山麓牧村(著者の本では西穂高村大字牧となる以前の古い呼称を使用している)を根城にして、あの「高山蝶」の研

リンデルワルト、ミューレンからのコースを先に歩き、ユングフラウでは降雪に会い、フィンデルンアルプでは、ウンターロートホルン斜面で、三本の可憐なエーデルワイスに再会した。

途中のツェルマットでは、郵便局の支局長でもあり、スイス山岳会の支部長でもあるウイリーさんと懇親会の打合わせに郵便局へ行った折、シャモニーからツェルマットへメンバーと来ておられた近藤等に会い、やはり山の撮影に来ておられた16%映画カメラマン塚本福次郎氏にも会い、他国での岳人との出会いをなつかしんだ。

ツェルマットの山岳博物館は夕食後ウイリー氏の計らいで九時頃



から特別観覧させて頂き、ウインパー遭難の話を開き胸迫る思いになる。この博物館はザイラー財団による協会が運営し、スイス山岳会が管理しているそうであった。

秋十題

小林碧郎

雪溪に米磨ぐや月のほり来る
翹おもき落葉のいろの高嶺蝶
月光に立ちて穂高の巖くらし
流木をあつめしダムに小鳥来つ
花野来て渉る夕映の浄土川
岩壁の憩ひ短かしななかまど
寝袋に覚め雲表のいなびかり
岩稜にこけもも熟れて鳥渡る
牧とちて花野に泉澄むばかり
葎干して噴煙の空澄む日なり

今回は時期外れで酒蔵は休んでいたの、古城内のワインの博物館を見学、ワインの歴史を知った。

今年最後に組入れたオーストリアのザルツブルグから、三時間半で達する、フィリンゲン・ブルートまでの途中で、エーデルワイス・シュピッツェという山の掘を通った。この山は大型バスでは登れないが、小型車なら山頂まで行ける展望

究にうちこんでおられた。三十年前の静かな牧の風景は、私の疎開当時の思い出にもつながらる。買い出しや勤労奉仕に汗を流して歩いた道である。

いまは失われたレンゲ田の写真。常念岳を背景にピンクに彩られたこの光景を見ていると、なつかしさに涙さえこみあげてくる。レンゲ田は花の海だった。その中に深々と沈んで花の輪を編んだ思い出は、女の子にとっては特に忘れられないものだ。

ポプラ並木が影を落とすワサビ田ーいまの黒い紗のシェード

台、エーデルワイスも咲くという山で、歩けば登り四十五分かかるということであった。

私たちは山麓で花の写真撮って休憩しただけでホテルへ向かった。

この町は人口一〇〇〇人の狭い町と聞いていたが、立派な教会を中心に品の良いホテルが軒あつて、正面にオーストリアの最高峰グロスグロックナーの仰げる素晴らしい町であった。

私たちは町の中心のホテル・ポストに到着したが、とても渋味のある立派なホテルで、今までこんな大勢の日本人が泊ったことは無いと驚かれ、マネージャーから、私に生きたエーデルワイスの花三本が、ブーケとしてプレゼントさ

はなはなは目障りと著者を嘆かせている。

「レンゲに続いてススキがなくなる」とは、ショッキングな発言である。撮影の途次、ススキ野に出合うと、死滅した安曇野の遺書を見る思いだとも述べている。心にしみるススキの原の連作である。

第三部「安曇野風物誌」は、蝶や「野草」を中心に編集してある。花と同格で毛虫が登場するあたりに、自然界に対する著者の姿勢がうかがわれる。

第四部「安曇野周辺」は美ヶ原、乗鞍など開発によって後退していく高原の自然景観への挽歌。

れた。

「また来年も是非どうぞ……」と言われ、想像以上に良い雰囲気になり心が動く思いだった。

翌日はバスツェルマットを歩いてクレバスを覗きに行った。グロスグロックナー(三九九七m)の雪の突峰を仰ぎながらの水河歩きは、今回のニュー・メインコースで、メンバーの皆さん大感激だったが、遭難者の捜索でヘリが飛んでいると聞き、皆の安全に気を配るガイドの様子に、私も全員に気をつけて歩くよう注意した。

水河から車に戻る途中の斜面に可愛いマーモットの親子がいた。

ここから眼下のダムの畔を歩いて深い溪谷のトラバースルートとその日は全員一緒に町まで、最後

第五部に「補筆」として解説とともに山麓随想が収められている。失われゆくものへの哀惜をこめた文章が胸をうつ。新と旧とを対比させた写真なども添えられていて、興味ぶかく読んだ。

心の中の「安曇野」の幻影を追いながら、私は一つ一つうなづきながら頁を繰っていった。岳を愛し安曇野に思いを寄せる人の座右に、ぜひ置いてほしい一冊である。

昭和五十七年七月十日 朝日新聞社刊 七四〇〇円 (鎌谷 緑)

図書紹介

のコースとして歩くことになっていった。

ダムの終るあたりでお昼時になったので、この付近の草丘でランチタイムをとった。

食後スケッチをしようと思つた岩山に登った女性が、

「エーデルワイスがあつた……」と叫ぶ声に登って見ると生毛の厚い立派な花が岩陰に三本咲いていた。今回は三カ所で三本のエーデルワイスに出会い幸な旅となった。

ヨーロッパのエーデルワイスも最近では少なくなつて、幻の花と言われるほど稀少価値があり、初めて見た人たちは、この花と水河の旅で目的を達し、その幸運を喜びあい、最終日のミュンヘンでは

大修館書店

島田襄著

四六判、仏装、10ボ組定価1,500円

遙かなりエヴェレスト

—マロリー追想—

小島烏水全集 全4巻 別巻1

編集委員 島田襄・串田孫一・山崎安治・近藤信行
第10回配本 2文庫時代(一)

N・デーレンフアース/T・ヒーベラー他著 日本語版監修
西堀栄三郎・宮下啓三 B4変型判 定価18,000円

図説百科 山岳の世界

穂苅三寿雄・穂苅貞雄共著
播隆上人は、山岳宗教登山者の代表的人物である。笠ヶ岳再興、穂高岳・槍ヶ岳の初登顶ならびに槍ヶ岳登顶への登路開拓等の業績は、日本の登山史上類をみないものである。本書は、偉大なる先駆者播隆の足跡を、豊富な資料にもとづいてまとめたものである。
A5判・272頁 3,600円



播隆

最新刊!!



槍ヶ岳開山

〒101 東京都千代田区神田錦町3-24 振替/東京 9-40504 電話294-2221<大代表>

名物のビールで乾杯し、また会う
報告
—— 科学研究委員会報告 ——

「大いに語ろう」

ヒマラヤの自然シンポジウム

- 一、日時 昭和五十七年七月四日 (日) 十時~十八時
- 一、場所 名古屋大学水圏科学研究所大講義室
- 一、主催 日本山岳会科学研究委員会

共催 比較氷河研究会・ヒマラヤの自然史を語る会・日本山岳会東海支部・名古屋大学水圏科学研究所補口研究室

- 一、参加者 佐々保雄、樋口敬二、渡辺兵力、野口秋人、水越武、渡辺興亜、小川務、小川幸恵、安藤忠夫、伊藤克郎、岡野輔仁、大野紀和、林克之、神山良雄、中村あや、若林幸子、安江安宜、横山宏太郎、長谷川浩、藤井理行、伏見碩二、川北仁、岩坪玲子、高木基楊、田中節子、遠藤京子、内田昌子、藤田博、大西康郎、松永直幸、竹中修平、ハロルド・ソロモン、石原俊洋、清水悟郎、和田一雄、井上治郎、大森弘一郎、千葉重美、高遠宏齋藤桂、梅野淑子、小野有五、小西奎二、前田文彦、神谷光昭、高橋詢、岩田修二、中川和道、中村純二、他十八名(比較氷河)

日までの合唱で別れを惜しんだ。

研究会々員、並びにヒマラヤの自然史を語る会々員) 計六十七名

- 一、内容 (A) ヒマラヤの気象
 - 山岳学のすすめ 樋口 敬二(名大)
 - ヒマラヤ山脈の気象 井上 治郎(京大)
 - ヒマラヤの気象予報 中島暢太郎(京大)
 - 登山と気象予測 渡辺 兵力(日大)
 - デイスカッション) 座長 中村 純二(東大)
 - 冬のヒマラヤ 池上 宏一(名大)
 - ヤルンカンの気象 上田 豊(山口大)
 - ヒマラヤでの気象予測—日本での準備実践 中川 和道(東大)
 - (B) 寒冷圏としてのヒマラヤの自然と登山)
 - ヒマラヤ・チベットの生物地理 和田 一雄(京大)
 - ヒマラヤ・チベットの地学 伏見碩二(琵琶湖研)
 - ヒマラヤ山脈の永久凍土

藤井理行(極地研)
○氷河—ヒマラヤの南と北、東と西 横山宏太郎(武庫川女子大)

○氷河 上田 豊(山口大)

○アイスキャッション) 座長 渡辺 興亜(名大)

○ネパール・ヒマラヤの氷河地形 小野有五(筑波大)

○氷河作用—氷河の編年 岩田修二(都立大)

○デブリカバ—氷河 吉田 稔(名大)

詳しい内容は、「ヒマラヤの自然」シンポジウム予稿集(残部少々あり、一部千円、申込みは科学研究委員会まで)にあり、そのハイライトは「山岳」誌上に発表される予定である。
この機会に、会場の設営その他諸準備のお世話になった水圏科学研究所樋口教授、渡辺興亜助教授はじめ樋口研究室の皆様、ならびに、尾上東海支部長や東海支部の方々に心からお礼申し上げます。
(前夜の七月三日には名古屋大学職員会館で懇親会が開かれ、樋口教授、佐々会長、尾上東海支部長、森助教授など計五十名が出席し、盛会であった。)

(中村純二)

お知らせ

◎行事案内

○スケッチ山行 集会委員会
十月三十日～三十一日 山中湖

講師 清野 恒 先生

○山岳研究所閉所式 山研運営委員会
十月三十一日 上高地山岳研究所

○現地集会 三水会
十一月六日～七日 奥秩父の峠

○自然保護全国集会 自然保護委員会
十一月十三日 静岡井川少年自然の家

○もみじ会 静岡支部
十一月十三日～十四日

◎秋山山行

十一月二十一日～二十三日 御在所岳
井川少年自然の家 集会委員会

◎ルーム行事案内

○講演会「同時登攀中の確保の科学」
十一月五日 科学研究委員会

○スケッチ山行批評会
十一月九日 集会委員会

○会員懇談会「ドイツ山岳映画」
十一月十五日 海外・総務委員会

☆問い合わせは各委員会
または事務局、集会委員会まで。

お知らせ

第一〇七回上高地

現地集会報告

三水会

九月四日(土)の「上高地山研でアンコロ餅と葉湯を探る集い」も今年で六回を数えるに至った。大半は同日朝の急行で新宿を出発。前夜からの雨模様で天気が心配されたが、電車が笹子トンネルをぬけると晴れ間もみえはじめ、ホッとす。松本で買物をすませタクシーに分乗、上高地に入った。午後四時には前夜発の徳本峠越え組、中尾峠散策組も山研に参集、勝田チーフ、岩堀サブの指示のもとに各人手伝いの真似をし、六時から副題である葉湯を探る集いに移行した。テーブルには葉湯はもとより各種のオードブル、おでん、すき焼、きのこご飯、そして主題

のアンコロ餅が次々と並び、その豪華さと美味は筆紙に尽くしがたいものであった。談笑はなかなか尽きなかったが十時には就寝。
翌五日(日)槍ヶ岳組が五時出発したのを始め、霞沢、穂高、乗鞍、中尾峠組が続き、全員八時には山研をあとにした。なお山行組は各々計画通り遂行した。

参加者 網倉志朗、荒野康子、岩堀瑞子、入沢郁夫、内山城、小野利次、片岡博、勝田房治、川北仁、木村俊博、小林碧、斎藤健治、坂倉登喜子、進藤波男、嶋原啓佑、高田真哉、塚原孝志、鶴岡元之助、富田郁夫、鳥居亮、中村久美子、沼倉寛二郎(アイウエオ順)と三水会便りでお世話になっている河和田屋印刷の地家、木村の両氏。(高田真哉)

会務報告

9月理事会

9月6日午後6時30分
本会・ルーム

出席者 佐々会長、神崎、西村、伊丹、高橋、岡沢、大倉、菅沢、高本、松家、鈴木、河村各理事、佐藤評議員、太田監事
(委任) 田口、渡辺副会長、赤松

川上、小倉、中村、水野、田村各理事、小原、村木、松丸、大塚各評議員、小倉監事

◎報告事項

▽会務報告(総務)、シエラクラブ来日、秩父宮記念学術受賞候補推薦、UIAA参加、70エベレスト総集編のVTR、東北地区会員親睦旅行、同朋舎「日本登山記録集成」発行の件、年次晩餐会準備

図書受入報告(2)

図書委員会

- 飯田睦治郎 渡辺和夫共著「気象衛星 [ひまわり] の四季」山と溪谷社 1982 (版元寄贈)
- 奥多摩山岳会コンデ・リ登山隊編「コンデ・リ峰登山報告書」1982 (編者寄贈)
- 若林修二編「写真集北の雪稜」北海道撮影社 1975 (編者寄贈)
- 信州山の幸研究会編「食べられる木の実草の実」信濃毎日新聞社 1981 (長沢武氏寄贈)
- 日本山岳会医療委員会編「登山医学/日本登山医学研究会誌」千曲秀版社 1981 (編者寄贈)
- 日本山岳会青年懇談会編「友情/日韓交流登山1981年」1982 (編者寄贈)
- 長沢武 河原勲 田中豊雄共著「長野県山菜・きのこ図鑑」信濃毎日新聞社 1979 (長沢武氏寄贈)
- Joydeep Sircar "Himalayan handbook" Ms. Rita Sircar 1979 (沖允人氏寄贈)
- 昭和57年7月分受入
- 牧野文子著「山への旅 りんどうは空を見ていた」アディン書房 1982 (著者寄贈)
- 甲南山岳会編「山嶽家 創立50周年記念特別号」1981 (越田和男氏寄贈)

- 田淵行男著「安曇野挽歌 田淵行男写真文集」朝日新聞社 1982 (版元寄贈)
- 鈴木昌友著「東日本の高山植物と山草」誠文堂新光社 1982 (版元寄贈)
- 麻賀進著「尾瀬霧幻 麻賀進写真集」誠文堂新光社 1982 (版元寄贈)
- 西野喜子著「源流は呼んでいる 山とイワナ仲間たち」岳書房 1982 (著者寄贈)
- 日本山岳会科学研究委員会編「大いに語ろうヒマラヤの自然」1982 (編者寄贈)
- 関口精一著「シルクロード詳図 蘭州からアラル海まで」1982 (佐々保雄氏寄贈)
- 吾妻山の会編「会報 No. 38 故武藤会長追悼特集号」1981 (河上敏治氏寄贈)
- 山岳同人・梁山治編「二塚健夫追悼号」1982 (浮塚正勝氏寄贈)
- 貞兼綾子編「チベット研究文献目録 日本文・中国文篇 1877～1977」亜細亜大学アジア研究所 1982 (編者寄贈)
- 田村真知子著「親と子のネパール探検」コンパニオン出版 1982 (版元寄贈)
- F. スターク著 勝藤猛訳「暗殺教団の谷 女ひとりイスラム境界を行く」社会思想社 1982 (版元寄贈)
- 白旗史朗著「カラー高山植物」東京新聞出版局 1982 (版元寄贈)

図書受入報告(1)

図書委員会

昭和57年5月分受入

- 1 1982年・東京・ニューゼーランド登山隊編「ニューゼーランド登山計画書1982年」石井貞男 1982 (石井貞男氏寄贈)
- 2 風見武秀著「世界の秀峰」東京新聞出版局 1982 (著者寄贈)
- 3 辻まこと著「辻まこと山の画文/岳人の表紙の画と言葉」白日社 1982 (小谷明氏寄贈)
- 4 瓜生卓造著「雪嶺秘話/伊藤孝一の生涯」東京新聞出版局 1982 (版元寄贈)
- 5 佐瀬稔著「裏われた岩壁/第2次RCCの青春群像」山と溪谷社 1982 (版元寄贈)
- 6 西尾幹二編「ドイツ文化の基底/思弁と心情のおりなす世界」有斐閣 1982 (宮下啓三氏寄贈)
- 7 岳人編集部編「登山ミニ百科」東京新聞出版局 1982 (版元寄贈)
- 8 岳人編集部編「山の雑学ノート」東京新聞出版局 1982 (版元寄贈)
- 9 魚津岳友会編「'80 早月尾根遭難報告書」1982 (編者寄贈)
- 10 オレル・フェスリ社編 岡沢祐吉訳「スイスの山々/SAC 山案内人の体験談」ベースボールマガジン社 1982 (訳者寄贈)

- 11 The Alpine Club "Alpine Club Library catalogue: books and periodicals" Heinemann 1982 (購入)
- 12 邱衍堯「首登喜馬拉雅」中華民国70年(水野勉氏寄贈)
- 13 Ardito Desio "La conquista del K2" Garzanti 1957 (水野勉氏寄贈)
- 14 C. G. Lewis "Tibetan venture" Robert Hale 1967 (水野勉氏寄贈)
- 15 M. S. Gill "Himalayan wonderland: travels in Lahaul-Spiti" Vikas (水野勉氏寄贈)
- 16 Alessandro Gogna & Reinhold Messner, translated by Audrey Salkeld "K2: mountain of mountains" Kaye & Ward 1981 (購入)
- 17 Reinhold Messner, translated by Audrey Salkeld "Everest: expedition to the ultimate" Kaye & Ward 1979 (購入)

昭和57年6月分受入図書

- 1 川口邦雄著「アルプスの登山鉄道」東京新聞出版局 1982 (版元寄贈)
- 2 武藤清次著「種蒔うさぎ」武藤清次遺稿集編集委員会 1982 (河上敏治氏寄贈)
- 3 福岡山の会編「せむり/創立50周年記念特集」1982 (編者寄贈)
- 4 横山篤美著「上高地物語」信州の旅社 1981 (版元寄贈)

印刷所

発行所 法人 日本山岳会
 編集代表 岡 沢 祐 吉
 電話東京(加) 四四三三
 振替口座東京三一四八二九番
 東京都港区赤坂一丁目三番六号
 株式会社 技報堂

昭和五十七年十月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四
 サンビュウハイツ四番町

57年度会費未納
 の方は至急お納め
 下さい。事務局

支部変更
 8778 坂井 広志(越後へ)

3日(火) 婦人懇談会
 17日(火) 婦人懇談会
 24日(火) 婦人懇談会
 31日(火) 婦人懇談会
 今月の来客者178名

ルーム日誌

(57年8月)

備報告、韓国山岳会来日希望の件
 ▽各委員会報告(月例資料配布)
 うち主な項目、(1)山研委では今年
 利用者激減のため対策検討中、(2)
 集委では毎月委員会連絡会を開
 き、行事日程、ルーム使用の調整
 を行なう、(3)自然保護委ではフ
 イールドマナーノート原案作成等
 ◎審議事項
 吉阪家寄贈図書重複分を図書交換
 会に出品の件、承認。